

諸原十三塚

1992. 3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

諸原十三塚

1992. 3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

序

平成3年度「スポーツ、余暇利用、青少年健全育成等」の事業を通じて世代間の交流をはかり、年間利用出来る公園づくりが辺地対策事業として計画され、「もろはら公園工事」が現在進行中であります。工事の着工にさきだち文化財の調査を実施いたしました。

調査いたしました所、中尾社の左右から10基の13塚といわれる塚が発見されました。前方に見える神の峯と正対している所にあります。調査を担当いただきました佐藤魁信先生によりますと、築いた目的、年代など不明な事が多く、塚内からは遺物は出ないと想であります。今回の発掘でも遺物は出て来ませんでした。

郡内に於ても13塚というものは現存するものが少くなり、今度の発見は貴重なものといえると思います。

当時の人達が生活の中、或いは文化的な観点から、どのような考えのもとに築き上げ、個人や集落とかかわっていたかを思いながら、その活動の一端をしのぶ事も大切な事と思います。

公園の整備と合せ、此の塚の保存について村・地区の皆さん方に御理解をいただきました。

調査は寒風の吹く厳しい季節に行われました。佐藤魁信団長を始め調査に従事された方々の御協力、地区の方々や関係する皆様方の御理解・御援助に対し厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

喬木村教育長 下岡重尊

例　　言

1. 本書は長野県下伊那郡喬木村小川上平諸原十三塚の調査報告書である。
2. 本調は、喬木村「もろはら公園」建設に伴う調査を喬木村教育委員会が実施した。
3. 平成3年10月上旬に公園建設用地内の立木の伐採によって十三塚の存在が認められ、公園計画で墳丘の保存不可能なもののみを発掘調査し、他は測量のみにとどめた。
4. 飯田下伊那地方の十三塚について、昭和30年、下伊那史第三巻に記載されたのを平成4年2月までの現状を調査し、調査結果を本書に加えた。
5. 報告書は佐藤がまとめ、遺構の実測は佐藤・牧内・松下が、製図は田口、写真は佐藤が分担した。

目　　次

序

例　　言

目　　次

挿図目次

I 環　　境

1. 自然的環境	1
2. 歴史的環境	1

II 経　　過

III 調査結果	4
----------	---

IV ま　　と　　め

おわりに	5
------	---

図　　版

調査団組織	11
-------	----

挿図目次

第1図 諸原十三塚位置及び周辺主要遺跡	2
---------------------	---

第2図 諸原十三塚及び周辺地形群図	3
-------------------	---

第3図 諸原十三塚配列図	7
--------------	---

第4図 諸原十三塚実測図	9
--------------	---

第5図 墳丘1号・2号断面図	9
----------------	---

第6図 飯田市下久堅野田十三塚の配置	11
--------------------	----

第7図の1 飯田下伊那地方の十三塚分布図	13
----------------------	----

第7図の2 飯田下伊那地方の十三塚分布図	14
----------------------	----

第8図 伊豆木中屋釣根十三塚	14
----------------	----

第9図 泰阜村金野高ぼっち十三塚	15
------------------	----

I 環 境

1. 自然的環境

諸原十三塚は長野県下伊那郡喬木村小川上平諸原（もろはら）の尾根状台地に所在する。

飯田・下伊那地方は、東に赤石山脈が連なり、西に木曾山脈が聳え、その中間を天竜川が南下して、その両側に見事な段丘が発達している。天竜川の東岸一竜東地区は背後には赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が大西山（1741m）・鬼面山（1889m）・氏乗山（1818m）・金森山（1702m）となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起伏をもちながら段丘面に連し、天竜川の氾濫原へとさがっている。天竜川の右岸一竜西地区に比し山麓からのびる扇状地は狭小で段丘面の幅員も全般的には狭いが、豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく、特に北から豊丘村の三次原・田村原・林里・伴野原、喬木村の城原・帰牛原・伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と続く中位段丘面の幅は広く典型的な段丘地形を形成している。（第1図）

小川上平諸原は、伊久間原と帰牛原段面の間にあって、南には小川川、北は小川川の支流鞍馬沢にはさまれた尾根状台地に立地している。小川川に沿う馬場平・兩平・田本平の平坦面の北は、比高90mの段丘崖となり、その上に南北100~200m、東から西へ1000mと長くのびる上平段丘面があり、標高508~530mを測る。さらにその北は比高50mの急傾斜をもつて南北幅30~50m、東西約700m、標高505~584mの尾根状台地となる。北は比高50mの鞍馬沢の形成した谷間となり、狭い水田が流れに沿って並んでおり、この谷を越えると帰牛原である。

この尾根状台地西は、真淨寺の寺山と呼ばれており、台地東端部近くに今次調査の十基の小円丘が東西方向に一列に並んでいる。また、この台地西端部には、中世知久氏の支城松下城跡がある。

諸原は展望のよい丘陵にあって南5.5kmに知久氏の本拠神ノ峰城跡を望み、北に阿島城跡・伴野城跡、南西に伊久間城跡等知久氏の支城が指呼の間にある。天竜川を隔てた南西に小笠原氏の本拠松尾・鈴岡城跡を望み、飯田盆地を一望におさめる位置にある。（第2図）

2. 歴史的環境

下伊那史第三巻の「付録 下伊那の伝承古墳・古墳以後の塚」に、喬木村お寺山十五塚（十三塚とも）について、次のように述べられている。

小川の上ノ平、真淨寺の裏に横たわる丘陵がある。その北西端を城山と呼び、神峯城主知久氏の支城のあったところで、真淨寺の直後を真淨寺山、またはお寺山という。北方鞍馬沢の谷からきて真淨寺へ出る細道は、この道の西側尾根上の延長177mの間に、大小16この小円丘があった。これがお寺山十五塚（または十三塚ともいう）である。排列線の方向は30°を指し、各丘の間隔は5.15~19.1mで、封土径は3.03m~4.85m、封土表面は雜木を生ずる。

大正11年7月28日鳥居龍藏博士がこの地を踏査したい、その最大なものにつき発掘を試みたが、出土遺物はなく古墳と決定すべき何らの手がかりを得られなかった。然るに30年後の今日は一つ残らず振り平げられて全面畑となり、昔の面影は全く失われてしまった。

伝説によれば、二百余年前真淨寺が焼失した時、經藏などの灰をここに埋めたものであるとのことであるが、それにしては数が多すぎる。あるいは、近くの松下城防備の一つとして擬勢を張るために築いた旗



第1図 諸原十三塚位置及び周辺主要遺跡

0. 諸原十三塚
1. お寺山十五塚
2. 松下城跡
3. 小川の場連跡
4. 小川上平連跡
5. サカリ窯址
6. 馬場平連跡
7. 黒牛原遺跡群
8. 伊久間遺跡群
(北端)
9. 里原古墳群
10. 阿島城原城跡
11. " 熊野支城
12. 伴野城跡
13. 郭1号古墳
- " 知久氏館址
14. 阿島遺跡
15. 岩田城址

第2図 諸原十三塚及び周辺地形群図

1. 諸原十三塚、2. お寺山十三塚、3. 松下城址



塚ではないかと、市村咸人先生は述べられている。今次発見された十三塚は、それより東500mにある。

周辺の遺跡をみると、諸原の南崖下の上平の平坦面の西端部に的場遺跡があり、昭和63年度に工場建設に伴う用地内、及び取付道路の立合調査で、土壙2基、焼土と床面を残す住居址とみる切りとり面を検出している。土壙1号は底部中心に弥生後期大形壙が斜に置かれた状態で検出され、壙棺とみられた。全体的に出土遺物は少なく、縄文中期土器片、磨製石斧、打製石斧の出土をみる。また用地内北東境界付近で中世後半の内耳土器片・無釉壺片、黄瀬戸片の出土をみ、上段面にある松下城跡との関連とみられた。

的場遺跡の東に上平遺跡があり、縄文前期土器片、土師器片の出土をみるが、遺物は少ない。平成3年度3月中には広域農道に伴う発掘調査が予定されている。

上平遺跡の東端部の段丘崖縁部に近世のさがり窯址がある。

上平段丘西崖下にある馬場平遺跡は、縄文前・中・後期、弥生中・後期の遺跡があり、里原から馬場平にかけての里原古墳群は注目され、現在墳丘を失しているが1号墳よりは四神四獸鏡・玉類・磁石・鏡の出土をみており、4号墳では土師器の台付盆・須恵器の頸・円筒埴輪片・形象埴輪片の出土もみている。小川川を越えた南の伊久間原段丘面は、有舌尖頭器の出土をみ、縄文早・前・中・後・晚期の集落址。弥生中期・後期、古墳時代前・中・後期の大集落址が検出され、平安時代・中世の造構も検出され、段丘中央部西縁部には知久氏の支城伊久間城跡があったが、現在その跡はみられない。

諸原の北は、鞍馬沢の谷を越えると帰牛原段丘面となり、ここには縄文中期後半の集落址、弥生後期の集落址が検出され、段丘西端部には弥生後期の方形周溝墓群が検出されて注目されている。

帰牛原の北は加々須川を隔てた段丘、城原には知久氏の支城阿島城跡があり、城原段丘西端部南側に城原本城が、谷を隔てた熊野に支城が構築されたのが1990年の発掘調査によって検出され、注目された。城原の北には壬生沢川を隔てた伴野原段丘南端部には知久氏支城伴野城跡がある。

加々須川下流域の左岸沖積段丘面には竜東唯一の前方後円墳第一号墳があり、江戸時代の知久氏の館址も存在する。右岸最低位沖積段丘面には弥生中期阿島式土器の標準遺跡の阿島遺跡があり、南の飯田市下久堅と喬木村富田の境には知久氏の支城富田城がある。

II 經 過

平成3年に諸原の台地東端部に、住民の憩の場として喬木村が「もろはら公園」を建設することになった。

諸原の西800mの尾根上には松下城跡があり、また真淨寺のすぐ裏山のお寺山には、かつて十五塚（十三塚ともいう）があり、大正11年鳥居龍藏博士によって最大円丘の一つが発掘され遺物はなく、何であつたかの手掛りはなかったと報ぜられた。その後には煙となって円丘は崩され、昔日の面影はなくなつたと市村咸人先生は下伊那史第三巻で述べられている。

公園建設用地は、お寺山より500m東の台地東端部で、ここに十基の小円丘の排列が立木を伐採したあとに発見され、十三塚と認められ、その調査と保存について考慮された。

調査日誌

10月9日（くもり・雨） 諸原の公園用地を見にいく。荒れた畠と、山林になっており、尾根状台地であり、遺跡であるかは不明。工事中の立合調査することにする。

11月7日（はれ） 重機による排土作業がはじまり、立合調査するが、遺構・遺物の出土なし。立木の伐採あとに3基の小円丘の並ぶを発見し、十三塚と認める。

11月8日（雨） 小円墳の調査準備するが雨で中止する。

11月9日（はれ） 東より円丘を1号…2号とし、3基の測量、1号墳の断面調査。松の根がはり苦労する。3号墳は削平され痕跡を残すにすぎなかった。

11月11日 菅木村教育長と、遺跡発見届、発掘届について話しあいをする。

12月6日 公園工事進行に伴い、十三塚はどうするかを見にいき、神社西側に五基、東隅に3号墳から西に二基の小円丘を伐材あとに発見する。このため上平地元責任者平沢村議会へ寄り、保存について話しあい。村役場で村長に保存について要望する。

12月12日（くもり・小雪僅かまい、終日寒い） 東側1・2・3号は公園計画上破壊することになり、1・2号墳の断面調査を行う。3号墳はすでに崩されており、調査は立合調査のみにする。いずれも遺物はなく、盛土したものと確認された。

現地調査を終え、平成3年内に、図の整理を終える。

平成4年となり、諸原遺構図の縮尺をなし、図を完成させる。一方十三塚の飯伊地方の分布を調べるが、大半は破壊されており、現存するを調査する。

十三塚についての柳田国男説、下伊那史第三巻等により、その性格を調べる。

その後、原稿の執筆にかかる。

III 調 査 結 果

かつてのお寺山十三塚は昭和27年頃の調査では、墳丘は崩され煙となっていたと市村成人先生は、下伊那史第三巻で述べられている。

今次発見の十三塚は、お寺山より約500m東の尾根状台地の東端部にある。大きな松や雜木の茂みのため、今迄人の目にふれずにいた。公園計画による伐採あと墳丘の並びが発見された。墳丘は64mの間に一列に並び、N35°Wの方向を示す。墳丘の大きさ、高さ等は不同で、その間隔とも不同であり、列の方向には僅かな狂いをもつが、ほぼ一列を保っている。墳丘規模等は第一表のとおりであり、配列は第3・第4図に見るようである。

墳丘の調査は、最初の1号の断ちわり調査を人力でなしたが、松の大きな切株・雜木の根が張っており、やむなく4分の3程の調査をおわる。その後公園造成計画で1号～3号は破壊のやむなきにいたる。3号はすでに削平され、痕跡を残すのみであった。4号～10号は保存することになり、測量のみにとどめた。

1号の残り部と、2号は上層の切株を重機で抜根し調査する。

調査結果（第5図） 上層5～10cmは木の葉の腐葉土をかぶり、2層は頂上ではロームの盛土が70～80cmあって、第3層は10～15cmの盛土前の表土とみる暗褐色があり、第4層のローム層となる。遺物は全くなく、また、下層のローム層には、さらに下に掘りこまれた痕跡は残していない。調査結果をまとめると、

(1) 墳丘の盛土は、周りの土を盛ったものではなく、尾根の北東縁部より主としてローム層を運んできて表土の上に積み重ねたとみる。

(2) 墳丘造成の際、地山を掘り下げて何かを埋め、その上に盛土した痕跡はみあたらない。

(3) 封土中、底部から構築年代を知る手がかりとなる遺物は何一つ発見されていない。

飯田下伊那地方で十三塚の発掘調査例をみると、大正11年に鳥居龍藏が菅木村お寺山十五塚（十三塚とも）の最大なもの1基を調査した。何の遺物の出土はなく、古墳と決定すべき何等の手がかりは得られな

かった。(市村威人下伊那史第三巻『付録下伊那の伝承古墳・古墳以後の塚』)

昭和44年1月、飯田市下久堅地区の尾根一带に農協が稚蚕飼育桑園を造成することになり、この尾根には野田十三塚が二列に東側に大きな墳丘が10基、西側には小さい墳丘が11基、N33°Wの方向に並んでいた。このため7基について発掘調査を行ったが、出土遺物はなく、墳丘下層のローム層は掘りこまれた痕跡はみられず、墳丘の盛土はその周辺の土を盛った痕跡ではなく、離れた場所からローム層を主にして運んで盛り上げたとみられた。築造時期を決めるものはなく、何の目的で造ったかも不明があった。(大沢和夫・佐藤「飯田市野田十三塚の発掘」考古学ジャーナル昭和44年8月刊) (第6図)

以上の二例があり、今次調査と同じ結果が示されている。十三塚が何の目的で作られたか、何時の時代に築かれたかは不明のままで調査は終っている。

十三塚の築造については、いろいろの説がある。柳田国男は「十三塚」で、①戦死者を葬った。②13人を殺害した人が、供養のため作った塚である。③父母の死後十三回忌までの十三度の法要を営む度に一基ずつ作った。④仏教の十三仏・儒教の十三経・道教の十二神及び一神の思想を表現したものである。⑤真言宗で障害鎮圧のため聖天十二天の塚である。⑥村境に塚を作つて村民の平安を祈つた。⑦疫病や害虫の起きるのは亡魂の仕わざであるから、その靈をなぐさめるために作った。⑧村境を示す境塚である。⑨修驗道の山伏と関係がある。⑩陰陽道では祭礼のため塚を作つて旗をたてた。などを挙げている。

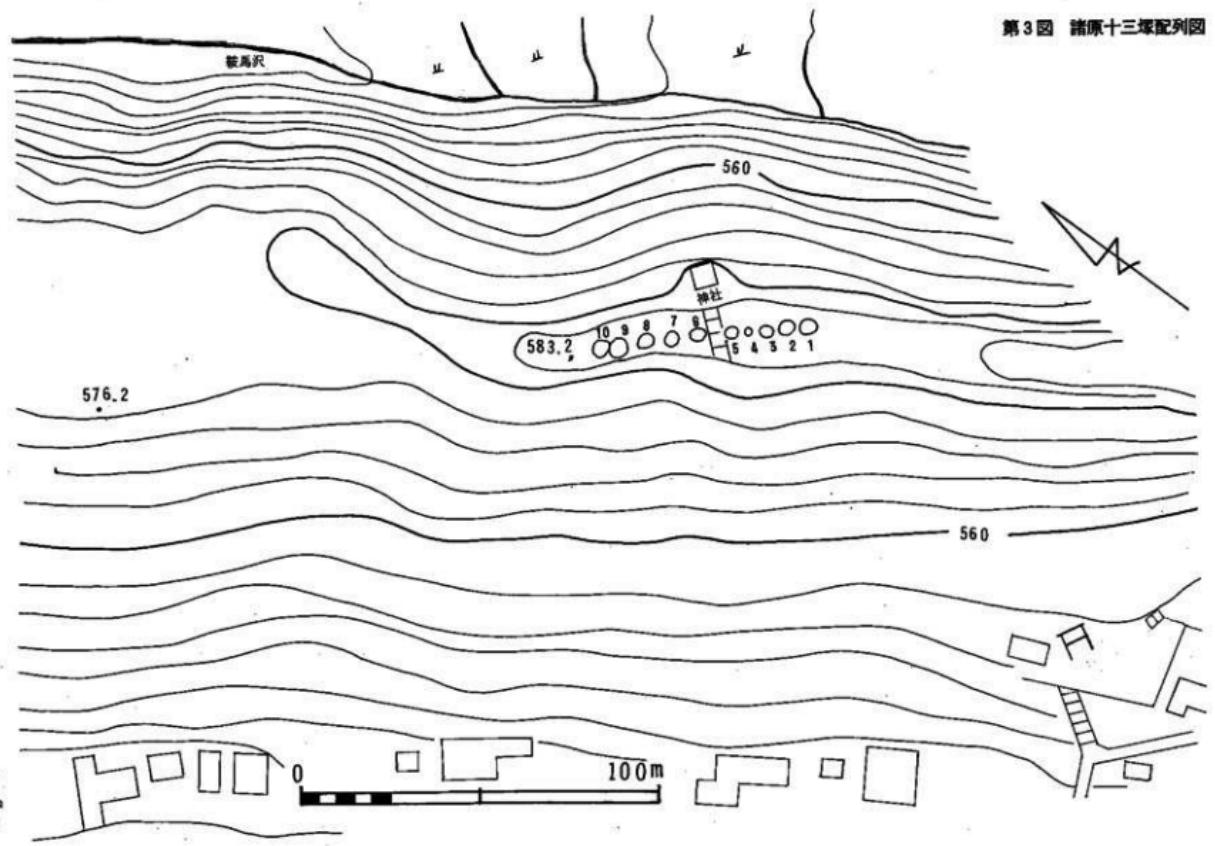
民俗学辞典には「起源の意味はまだよくわからないが、とにかく供養塚であったらしいことは察せられる」とある。早川考太郎は、年忌追善のとき忌日に配した仏。十三仏と関係あるとしている。大澤和夫は民間信仰に關係をもつた塚であると考えている。

以上の信仰に間連する塚とみると対して、一志茂樹は「戦国時代他領と兵を構えるとき旗をたてて虚勢をはつた旗塚であろう」とし、市村威人はこの説を支持している。

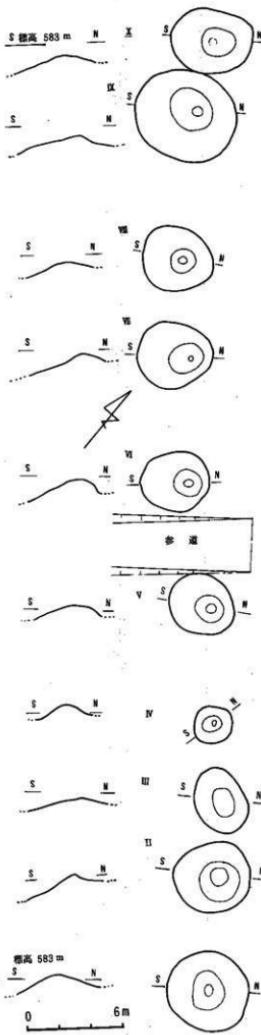
諸原十三塚 墳丘計測表(第1表)

墳丘 No.1	墳丘径(m) 南北×東西	高さ(cm)	隣接との間隔 (m)	備 考
1号	5.0×4.8	122	2号と2.3	南端にあり、断面調査。公園計画で全面破壊。
2号	4.7×5.9	106	3号と0.4	断面調査後、全面発掘。公園計画で破壊。
3号	4.0×3.1	55	4号と1.4	発見時に上部は削平され、痕跡を残すのみ。公園計画で破壊。
4号	2.4×2.45	57	5号と4.5	調査終了後未発掘で破壊。
5号	4.0×3.85	103	6号と4.0	西側は神社参道で一部切られる。
6号	3.95×4.20	135	7号と4.8	南西面は急傾斜面にかかる。
7号	4.10×4.90	130	8号と1.95	"
8号	4.15×4.35	116	9号と4.05	"
9号	5.07×6.03	102	10号に接す	"
10号	3.95×4.08	90	北端	"
10号の北西は畠と道になっており、崩された墳丘があったとも思われる。				5号～10号は保存される。

第3図 諸原十三塚配列図

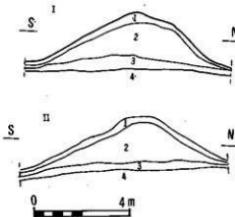


第4図 諸原十三塚 実測図



第5図 塗丘1号・2号断面図

1. 麻葉土 2. 盛土, ローム層
3. 盛土前の表土(暗褐色土) 4. ローム



VI まとめ

諸原十三塚の調査でわかったことは、前述のとおり、何の埋葬・埋蔵の痕跡のなかったことである。

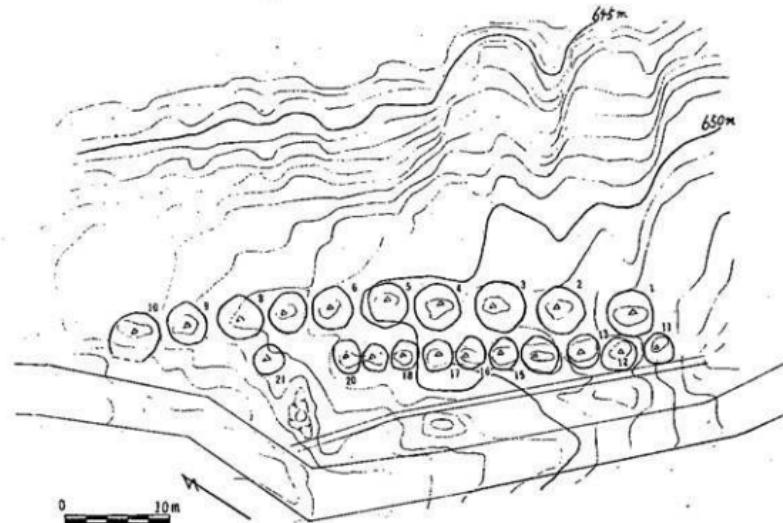
墳丘は尾根上に、特に小さいもの、削平されたものの2基を除けば、径4~5m、高さ1~1.3mの円丘が接しあいものから4.8mの間隔をもって10基が二列に並んでいる。この形態・規模は今迄飯田下伊那地方に知られている十三塚の共通するものである。(第2表)

諸原の立地は、眺望の良い尾根上にあり、尾根続きの西端700mには、中世竜東地域を支配した知久氏の支城松下城跡があり、その東側にはお寺山十五塚(十三塚とも)がかつては存在していた。南方5.5kmに知久氏の本拠神ノ峯城跡を望み、南西2kmに伊久間城跡、北西2kmに阿島城原城跡がある。天竜川隔てた対岸、上郷町の原ノ城・飯沼城、座光寺の北本城、高森町の松岡氏の本拠松岡城跡に対している。

飯田下伊那地方に分布する十三塚の立地をみると、いずれも展望の良い尾根上・丘陵縁部に造築されており、中世後半戦国豪族の城跡・居館との関連を思わせる位置にある。(第7図)

松川町大島の諸原十三塚は、片桐松川に面す段丘縁部にあって、北1kmに片桐氏の本拠船山城を望み、南0.5kmには片桐氏の支城名子城がある。高森町吉田十三塚の南東0.5kmに松岡氏の支城吉田本城が、南2kmに松岡氏の本拠松岡城を望む。飯田市毛賀御射山十三塚は背後に松尾城、南西に鈴岡城があり、天竜川を隔てた対岸には知久氏の本拠であった知久平城に対している。

山本の雨堤十三塚は杵原台地の東端部にあり、眼前に久米ヶ城を望む。三穂の中屋約根(第8図)・称宣屋約根の十五塚は、伊豆木城・久米ヶ城を望み、三穂下瀬の沢塚は阿知川を望む左岸の丘陵にあり、阿知川を隔てた南に下条氏の支城小松原城に対する。



第6図 飯田市下久堅野田十三塚の配置

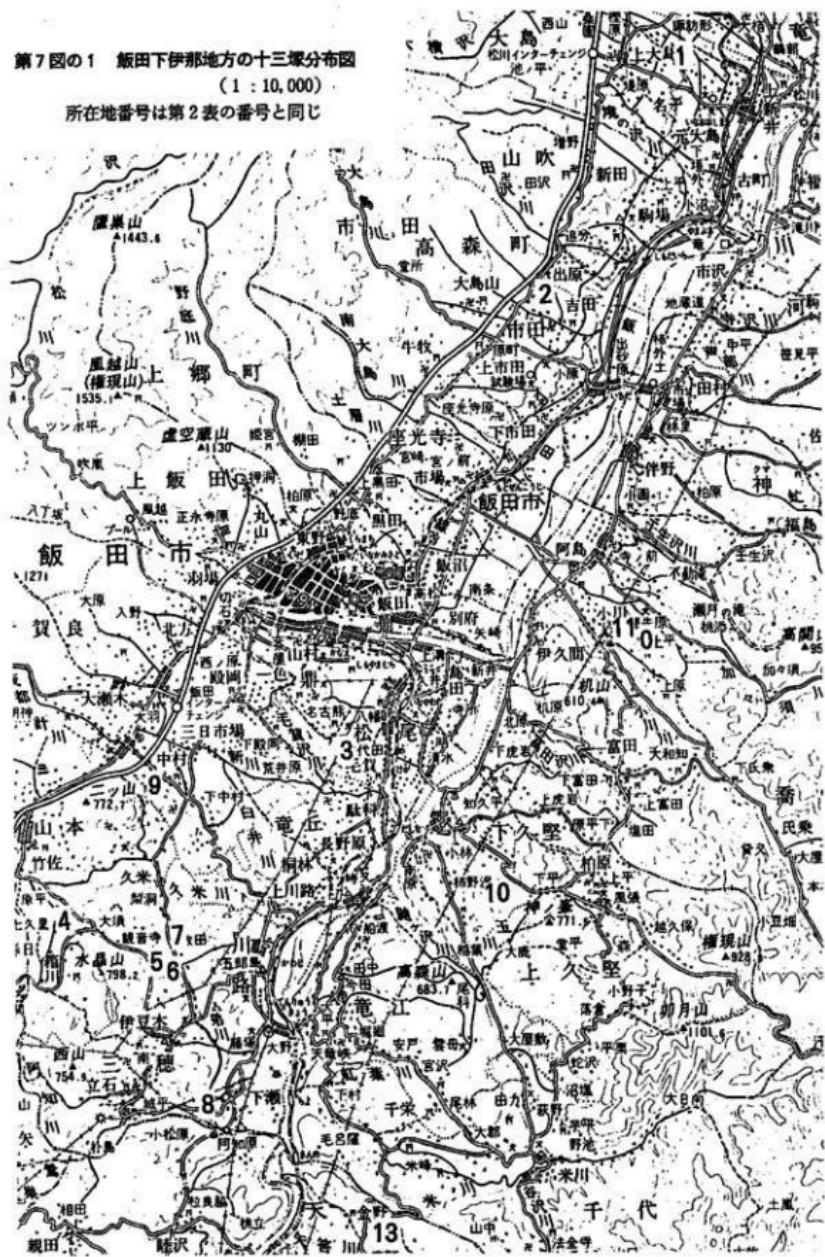
飯田下伊那地方の十三塚一覧表（第2表）

分布図No	所在地・立地	名 称	規 模	現 状
1	松川町元大島 段丘縁部	戸原の十三塚	13基あり、直径4.5~7.0m 高さ0.6~1.1m 総延長 225.5m	大正12年の調査であるが、昭和初年ごろから開墾がはじまり畑となり、現在なし。
2	高森町吉田 一本松丘陵縁部	吉田の十三塚	径3.5~4.3m、間隔7.7~8m 一直線に南より北に8基が並ぶ	現在不明。跡をとどめない。
3	飯田市毛賀 丘陵縁部	御射山十三塚		十三の小塚が並んでいたとの言伝え
4	飯田市山本竹佐 丘陵縁部	雨堤十三塚	杵原台地東端部。50mの間に11基が並ぶ。径2.8~3.8m、高さ0.5~1m	昭和初年には8基あったが、昭和30年代には2基となり、現在では跡をとどめない。
5	飯田市伊豆木 尾根上	中屋釣根 十三塚	10基が、径4.5~8.5m、間隔6~15m、高さ0.8~1.5m	1992年2月14日所在を調査。6基が一列にほぼ東西方向に並び、東側は断崖に崩されたとみる。(第8図)
6	飯田市伊豆木 尾根	称宣屋釣根 十三塚	三池村跡には中屋釣根十三塚とカギ状に5基が並ぶとある。	1992年2月14日調査するが、この位置は中屋の位置ではない。開墾され畑となっていると、下伊那三巻にはあるが、中屋は急な尾根で開墾のできる場所でなく、別の場所にあった。十三塚とみると疑問がもたれる。
7	飯田市伊豆木 尾根上	盆地洞十三塚		10數基並んでいたと、言伝えられるが跡をとどめない。
8	飯田市三徳下瀬 丘陵縁部	沢 塚	11基、径2~3m 高さ0.8~1.5m	1号・11号が残るのみと昭和30年代調査でいわれているが、現在ははっきりしない。
9	飯田市中村 山麓	梅原原十三塚		山林中に十三塚があった。発掘の際に直刀・土器が出土したと伝えられるが不明。開墾されて跡はない。
10	飯田市下久堅柿 野沢 尾根	野田十三塚	2列に並び北東側に大きい塚ほど3~4mが10基並び、南西側に2mはなれて径2~3mの小さい塚11基が並ぶ。	昭和44年農協椎葉桑園造成に伴う発掘調査。全面破壊される。(大沢・佐藤、「野田十三塚発掘」考古ジャーナル昭44.8) (第6図)
11	喬木村小川上平 尾根	お寺山十五塚 (十三塚とも)	15基が真淨寺裏山に径3.03~4.85mが177mの間に並ぶ。大正11年調査。	終戦後調査の際には、開墾され畑となって、封土なし。
12	根羽村月瀬柿 尾根	柿十三塚	径1.5~2m、高さ0.5~1m、13基が並び、北から二つ目を掘るが、出土遺物なし。	現在、雜木林の中で、崩れたりしてはっきりしない。
13	泰阜村金野 尾根	高ぼっち 十三塚	南北56mに9基が南北方向に並ぶ。径最大が6m、大半が4m、高さ0.6~1.1m。	壇丘を残して東西両側は削りとられて畑となっている。(第9図)
0	喬木村小川上平	諸原十三塚	今次発掘調査	1991年発見

第7図の1 飯田下伊那地方の十三塚分布図

(1 : 10,000)

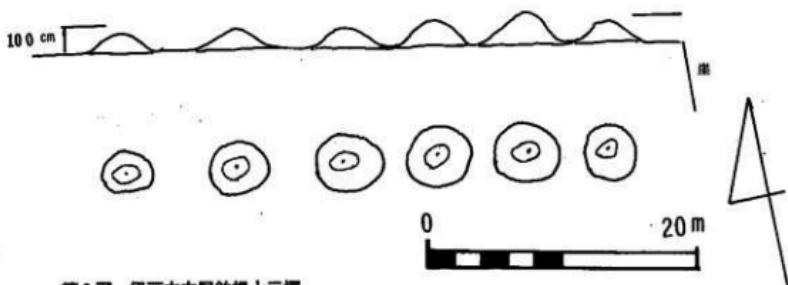
所在地番号は第2表の番号と同じ





第7図の2 飯田下伊那地方の十三塚分布図
根羽村樹十三塚 ●…境塚

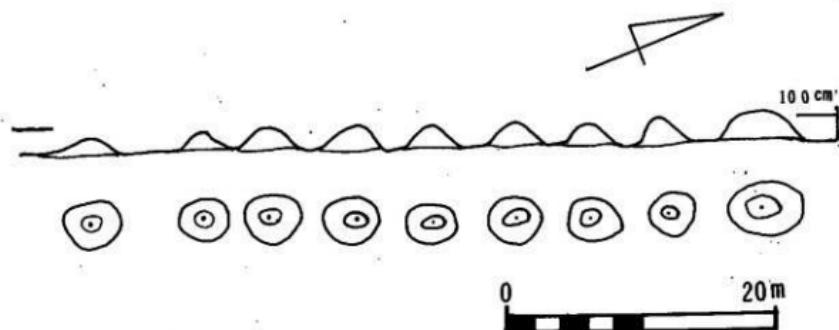
今次調査の諸原十三塚の西500mにあるお寺山十五塚（十三塚とも）は、松下城の東に隣接し、同じ尾根続きにあり、同時期に、同目的に築造されたとみられる。



第8図 伊豆木中屋釣掛十三塚

根羽お神十三塚は、旧根羽村と月瀬村の村境の尾根上にあり、境塚と伝えられているが、西0.5kmに月瀬城があり、美濃の国境は西2kmにあり境塚がある。また、根羽川の対岸には三河へ通じる旧三州街道が通っていた。南西2kmには榎路峠があり、榎路峠には三河との国境の境塚がある。秦阜村金野高ぼっち十三塚は、知久氏の南の主要な支城鷲ヶ城（下村城）を北西2.5kmに望み、東北東3.5kmには川手氏峠があり、西は天竜川を隔てて下条氏の支城小松原城に対している。（第9図）

下久堅柿ノ沢野田十三塚は、昭和44年本格的に調査した下伊那地方唯一のものである。この発掘によって十三塚は何の目的で築かれたかは、出土遺物ではなく、いつの時代に造ったかは不明であった。調査を担当した大沢和夫は民間信仰に関係する塚と考え、佐藤は知久氏の勢力を誇示するための旗塚であると考えた。（飯田市野田十三塚—昭44. 考古学ジャーナル）野田山とよばれる尾根は、背後1kmに神ノ峯城を望み、天竜川を隔てた段丘線部には、小笠原氏本拠の松尾城・鈴岡城が対峙している。十三塚は武田侵攻の際、戦死者を葬った塚であるといい伝えられた俗説は否定された。



第9図 泰阜村金野高ぼっち十三塚

以上、飯田下伊那に現存し、また、存在したことが知られる十三塚についての共通点をみると、①眺望の良い尾根上または丘陵縁部に築かれている。②中世戦国動乱期の城郭との関連をみる位置にある。③各十三塚の所在地域の住民のほとんどの人たちがその十三塚について全く知っていない。④その他の十三塚についての確たる伝承はない。……等があげられる。

十三塚は何の目的で築造されたかを考察すると、発掘調査結果、何の目的で、何時の時代に造られたかを知る遺物は何一つ発見されていない。このため、戦死者を葬った説は否定される。国境・領地境に残る塚塹とは異なる。(根羽村には、美濃の国境一池の平の塚塹、三河との国境一杣路峠の塚塹、桧原の七ツ塚等がある。)(第7図の2)

信仰の場であったとすれば、周辺の人達からは昔はそこでお祭りをしたとか、お供物をしたとかの言伝えは聞かれないし、その近くにある十三塚さえも知らない。

飯田下伊那地方の十三塚の分布する立地が戦国豪族の城郭や居館に接するものから4km位の範囲にあり、また、天竜川を隔てた対岸の城部に対峙しているものが多い。

このようにみてくると、飯田下伊那地方の十三塚については、民間信仰説・戦死者の墓の伝承・旗塚説等諸説まちまちである。これ等の説については考慮されるが、下伊那十三塚の立地状況からみれば、戦国動乱期に他領と兵を構える際に旗を列立てて虚勢を張るために築いた旗塚であると考えたい。

参考文献

1. 下伊那史第三巻「附録 下伊那の伝承古墳・古墳以後の塚」昭和30・12
2. 大沢和夫・佐藤魁信「飯田市野田十三塚の発掘」考古学ジャーナル 昭和44・8
3. 三穗村誌「第三章古墳時代 第四節古墳以後の塚について 三 十三塚」昭和63・7

おわりに

諸原十三塚は「もろはら公園」の建設によって雑木の伐採によって初めて発見されたもので、その存在は全く知れていなかった。

公園計画のため事例の1～4号の四基は破壊されたが、西側の6基は十三塚の形態を良く残している。ここは駐車場計画地になっていたが、地区の方々の要望・村当局の理解により保存することになったのは何よりのこと喜ばしい。

昭和30年発行の下伊那史第三巻『付録 飯田の伝承古墳・古墳以後の塚』に市村成入先生は、各地に残る14の十三塚を調査されており、大正11年調査の際にみられたのが、昭和30年代には形をとどめるのは5・6基であり、その多くは1部を欠き、1部を残すのみの状態であった。その後今日においてその形態を残すのは、三穂伊豆木中尾根根では、10基のうち6基が尾根上に残り、他は北面の浸透崖によって崩されていた。(92. 2. 14調査) 泰阜村金野高ぼっち十三塚の調査(92. 1. 27)で、昭和30年調査時の9基が、東側と西側は墳丘を残して開墾され、十三塚を保存していることが認められた。

破壊された十三塚のうち本格的に調査したのは下久堅野田十三塚のみで、その他二・三の十三塚の一基を掘ったが何も出てこなかったとある。

現在の飯田下伊那地区の十三塚の保存状態からみて、新発見の諸原十三塚の保存意義は大きい。

今次調査にご理解をいただけた上平地区の方々、工事を担当された松島土建のご協力のあったことに感謝したい。

(佐藤 駿信)

図版 I 諸原十三塚もろはら公園用地



諸原から神ノ峯城跡を望む（右の高い山）



もろはら公園用地内



諸原から伊久間原・杣山を望む。手前の伐採が十三塚の所在地



諸原十三塚西端から松下城跡を見る（中央部の尾根上）

図版II 諸原十三塚墳丘



諸原十三塚 東から



祠の参道で切られ西側の墳丘 右から6・7・8号



諸原十三塚 西側を東からみる



諸原十三塚の墳丘



諸原十三塚の墳丘



諸原十三塚の墳丘



諸原十三塚の墳丘



諸原十三塚の墳丘



諸原十三塚の墳丘



諸原十三塚 9号墳



諸原十三塚の西側を
下の道からみる



もろはら公園建設工事



諸原十三塚の調査



諸原1号填丘の
1部たち割り調査



諸原1号断面調査



諸原2号断面調査

図版III 飯田下伊那に現存する十三塚





飯田市千代と泰阜村境の米川大橋
上から東をみる
右側手前で切れる尾根上に高ぼっ
ち十三塚がある



泰阜村金野高ぼっち十三塚 西側



泰阜村金野高ぼっち十三塚 東側

調査団組織

1. もろはら遺跡調査委員会

中川 勲	喬木村教育委員会委員長
下岡 重尊	喬木村教育長
桐生文雄	喬木村教育委員
鈴川英人	"
東原美寅	"
原 五郎	喬木村文化財保護委員会委員長
黒川良一	喬木村民歴史俗資料館専任主事

2. 調査団

團長	佐藤 駿信
調査員	牧内 佳子
調査補助員	松下 真幸
"	田口 さなゑ

3. 作業員

福島明夫	佐藤 いなゑ
------	--------

4. 事務局

柳沢治人	市瀬武文	原 俊文
------	------	------

諸原十三塚

1992・3

発行 長野県下伊那郡喬木村教育委員会
印刷 株式会社 秀文社
